

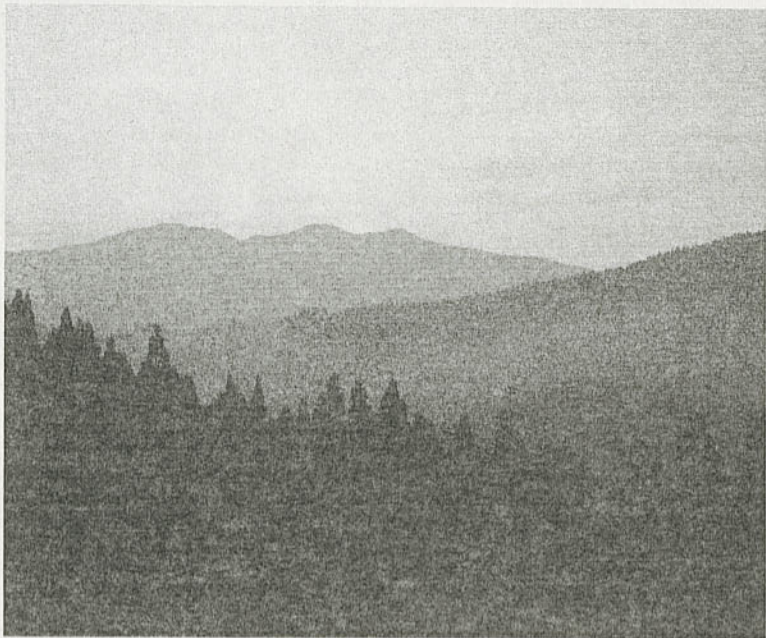
白山国立公園での取組みについて

加藤雅寛（環境省白山自然保護官事務所）

はじめに

白山は、御前峰（標高二、七〇二メートル）を最高峰とする、富山、石川、福井、岐阜の四県にまたがる独立峰である。白山はその名の示すとおり、周囲の山々より早く冠雪し、遅くまで雪が残る。その多雪気候により、山麓は豊かなブナ林に囲まれ、イヌワシやカモシカなどの希少種をはじめ多様な動物や、白山の名を持つ高山植物も含め多くの植物が生育している。豊かな雪解け水は、手取川（石川県）、九頭竜川（福井県）、莊川（岐阜県・富山県）、長良川（岐阜県・愛知県）の水源として、平野部を広く潤している。

また、白山信仰に由来する修験道の歴史は古く、開山は、七十七年。越前の僧泰澄大師によると伝えられている。禪定道やその起点となる馬場そして山の地名にも、



白峰西山から望む黎明の白山連峰

室堂や弥陀ヶ原、釈迦岳、餓鬼の喉、地獄のぞき等々が見られ、山岳信仰の歴史を感じさせる。また

白峰には、神仏分離令により下山した白山本地仏が安置されていたり、石徹白には、白山信仰に厚かった藤原秀衡が寄進した虚空蔵菩薩像とその守護を今も脈々と受け継いでいる人々が暮らしていたりと、現在もなお、白山信仰が暮らしの一部になっている。またそうしたものに裏打ちされた、郷土芸能や生活様式や建築物など、豊かで独特の文化も育まれている。

白山は、そうした自然と人間の暮らしが、現状ではいくつかの問題点も存在している。一点目には、前述のように四県にまたがっていることにより、広範な関係者が存在しており、意思疎通がなかなか難しく、またやろうとしても手に負い

要となってくる。端的に言えば、これがレンジャーと呼ばれる自分たちの仕事と言うことになると思おうのであるが、現状では、こうした機能を十分に発揮できておらず、またやろうとしても手に負い

て、これは何処の国立公園でも同様と思うが、登山道等の施設の管理などが行政だけではなかなか手が回らない状況にあるということである。特に白山の場合は、民間の山小屋が無く、登山道と避難小屋の多くが行政の手で整備され、管理されている。また、独立峰としては異例とも言える数多くかつ長距離である登山道が、この現状に拍車をかけている。三点目は、一点目にも起因することであるが、登山道等の施設の整備レベルや整備手法・管理のあり方について、コンセンサスが得られにくいということである。特に白山の場合には、県境を越えてコンセンサスを得るには難しい面が見受けられる。四点目には、登山者の一極集中がある。特に夏期に利用者が集中し、別当出合を拠点とする登山道では白山の年間登山者の七、八割が登ってしまいう現状があり、踏圧による登山道の傷みや周辺植

生等環境への悪影響が懸念されている。

それが現在、設立準備を行なっている。環白山保護利用管理協会（仮称）ということになる。

現在、設立準備事務局を組織し、設立準備にあたっている。その中で、あらためて、行政や民間のコンセンサスを得ながら、設立の目的や組織の柱となる要件を整理していくこととしている。

また、この取組みを目に見える形で存続できれば、さらにメリットは広がる。例えば、レンジャーなどの行政側の担当者が代わっても、蓄積された情報やノウハウが、失われずに活かされ、後戻りが無くなり、事業等を円滑に進めることができる。また、もつと身近に言えば、いつ行っても、知った顔があり、気軽に情報交換や意見交換ができることなどが挙げられる。また、関係者の意思疎通以外にも、現在バラバラにあるさまざまな情報を一括収集・整理し発信する体制が構築できれば、利用者へ速やかで充実した情報提供が可能になると考えた。

環白山への取組み

こうした現状の課題を少しでも解決するために、次のようなことを考えた。

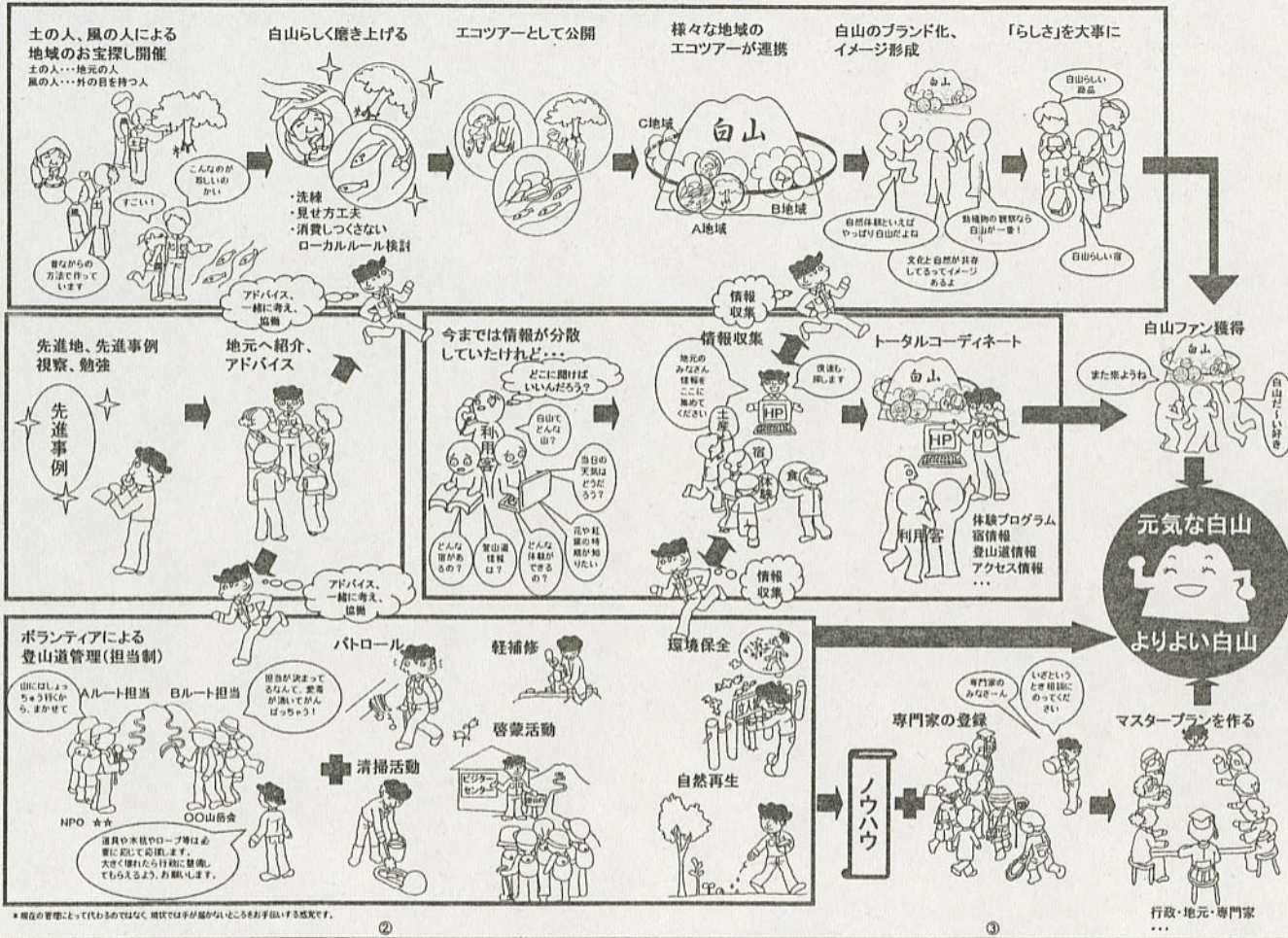
まず、県境を越えた広範な関係者が交流し意思の疎通が図れる場を創る。次に、行政だけでなく多様な民間との協働や連携を図り、互いに役割分担できる仕組みを創る。それぞれが役割を果たす中で、現場での協働や連携のノウハウが互いに蓄積され、最終的に皆が納得できる、希望もてる白山国立公園のマスタープランが、白山をとりまく関係者のコンセンサスを得て形づくられていければ良いと考えた。

白山国立公園をとりまく関係の中には、県境や行政と民間の垣根の他、多くの垣根が存在する。例

環白山保護利用管理協会（仮称）

それが現在、設立準備を行なっている。環白山保護利用管理協会（仮称）ということになる。

自然と文化の保全と地域活性化の共生



活動紹介パンフレット（事務局お手製）より

そうしていつの日か、その実践ノウハウを他の国立公園へも恩返しできる日が来れば良いなと思う。

将来にわたり、元気で豊かな白山を、そして元気で豊かな日本の故郷を、元気で豊かな国立公園を、残し受け継いで行ければ、そんなうれしいことはない。

おわりに

そして、常々白山以外にも目を向け、先進事例を学び、それを白山地域の人へ紹介したり、さまざまな活動へアドバイスをしたり、協働したりすることにより、白山に還元していければ良いと考えている。

そして、このような活動を通して、新たな白山の魅力を提案していければ、ワンパタン登山の一種集中から脱却し、自ずと利用の分散化が進み、年間の入り込み数は増加しているのに、自然環境への影響は軽減されているといったような将来が来るのではないかと考えている。

そして、常々白山以外にも目を向け、先進事例を学び、それを白山地域の人へ紹介したり、さまざまな活動へアドバイスをしたり、協働したりすることにより、白山に還元していければ良いと考えている。

そして、このような活動を通して、新たな白山の魅力を提案していければ、ワンパタン登山の一種集中から脱却し、自ずと利用の分散化が進み、年間の入り込み数は増加しているのに、自然環境への影響は軽減されているといったような将来が来るのではないかと考えている。

そして、常々白山以外にも目を向け、先進事例を学び、それを白山地域の人へ紹介したり、さまざまな活動へアドバイスをしたり、協働したりすることにより、白山に還元していければ良いと考えている。

そして、このような活動を通して、新たな白山の魅力を提案していければ、ワンパタン登山の一種集中から脱却し、自ずと利用の分散化が進み、年間の入り込み数は増加しているのに、自然環境への影響は軽減されているといったような将来が来るのではないかと考えている。

とした。そして、その価値を再確認することや、地域のお宝を上手に活用してエコツアーを実施し地域を訪れる方に喜んでもらえることなどで、地域が誇りと活気を取戻し、ゆくゆくは雇用が生まれ、その循環の中に自然と文化を保全するという昔ながらの人と自然の関係が再構築できればと考えている。また、そうした取組みを環白山のあちらこちらの地域でできるようじっくりと取組んでいき、環白山のお宝マップや各地域のエコツアーの連携等ができるようになっていければ良いと考えている。

他にも、動物や花、天気などの自然情報や、登山道情報、宿情報、交通機関等のアクセス情報、エコツアープログラム等の自然体験情報など環白山に関するあらゆる情報を収集し、リアルタイムで発信

したり、関係者同士の情報交換や意見交換ができるようなホームページの作成を行なおうと考えている。そうしたものを基礎に、白山を訪れたいと思った人に、その人の年齢や好み体力等に応じた、アクセスから体験プログラムや宿までを一貫してアドバイスできるトータルコーディネーターを協会が雇えるように努力しようと考えている。

また、現状では、登山道の管理が追いついていない処では、登山道ごとに担当する山岳会やNPOを決めるなど、ボランティアで愛着を持って日頃のパトロールや小さな補修や草刈り等、気づいたことができないきめ細かな管理体制が構築できないかと考えている。幸い、すでにそのような気概で取り組まれている山岳会や民間団体も

あり、そうしたところと連携し、さらに拡充して行ければ良いと考えている。またその他にも、登山道を毎日パトロールして回り、情報収集や利用指導を行ない、また手の回りきれない清掃活動やトイレ掃除や簡単な補修のお手伝いをし、ビジターセンターで入山前のレクチャーや時にはガイドを行ない、必要に応じて環境保全や自然再生の対策を講じるなど、いわば本当のレンジャーが協会が雇えるように努力しようと考えている。そうしたボランティアやレンジャーの活動が継続的に行なわれ、現場の自然環境や登山道の工法や維持管理の手法などのノウハウが蓄積できれば、どんどん素晴らしい白山になっていけると考えている。またそうしたノウハウに

であるし、皆が納得でき、希望のもてる白山国立公園のマスタープランを、白山をとりまく関係者のコンセンサスを得て形づくっていくる素地になるのではないかと考えている。

こうした活動を継続して行なっていくるように、事務局の他にも体制づくりを行なう班や広報やホームページを担当する班、エコツアーリズム等、地域活性化や地域保全等を担当する班、フィールドの維持管理や白山国立公園のマスタープランを担当する班などの班体制を構築し、活動を円滑かつ確実にこなすために、専属のスタッフを雇えるよう、資金を集める手だても同時に実行していこうと考えている。例えば、白山らしいグッズや、倒木処理や登山道等の施設撤去で出た廃材を利用したグッズの販売や、トイレチップ事業、募金や協賛会員を募ることや、認証マーク制度の導入などを考えている。また、こうした取組みには、資金以外にも知識や経験、時には特殊技能や体力、マンパワーも必要となる。そうした誰でも参加できるような常にオープンな体制を考えていければ良いと思っ